

三九七 是を見ては則ち以つて是と為し、非を見ては則ち以つて非と為す。忠孝仁義の事を見ては則ちこれを好み、残酷殺害の事を見ては則ちこれを悪む。夫れ其のこれを好みこれを悪み、其の是非を認めて誤らざるゆえんのは、其れ孰かこれをして然らしめん。

見_レ是則以爲_レ是、見_レ非則以爲_レ非、見_レ忠孝仁義之事、則好_レ之、見_レ残酷殺害之事、則惡_レ之、夫其所_レ以好_レ之惡_レ之、認_レ其是非、而不_レ誤_レ者、其孰使_レ之然_レ、

【訳】善いことを見て、これは善いことだとわかり、間違っていることを見て、これは間違っているとわかる。忠義や孝行、仁や正義の行い・様子・姿を見たらこれを好み、残酷で殺害など見てはこれを憎む。その善い悪いを見て間違えないのは、何かそうさせているからだ。

三九八 是に於いてか憬然として悟るあれば、則ち予は乃ち吾子輩の果して自ら其の心を識るを許すなり。

於是乎憬然有_レ悟、則予乃許_レ吾子輩之果自識_レ其心_レ也、

【訳】そういうことがはつきりと分かるのであれば、私は、みなさんが自分自身で判断するのを認めるだろう。

三九九 是れより以往、書を読み学を講じ、師に事え友に交わり、処に従い時に従い、始めて以つて商量すべきあり。丑一月廿七日、録して書生に示す。

自是以往、讀書講學、事師交友、隨處隨時、始有_レ可以商量_レ矣、

丑一月廿七日、録示_二書生_一、

【訳】今後は、書物を読み、学問を語り、師に教えを受け、友と一緒に学び行動し、自分の生きている場所で、また時勢の中で、生きるべき最善の道を考えるのだ。

明治十年一月二十七日、書いて塾生に示す。(草庵65歳)

四〇〇 昔、韓信飢えて、漂母に寄食す。夫の淮陰の才を以つて、天下を經營し、綽として余裕あり。而るに反つて以つて一身を資く能わず。其の故は何ぞや。

昔者韓信饑、寄食於漂母、夫以淮陰之才、經營天下、綽有餘裕、而反不能以一身、其故何也。

【訳】 韓信は若いころ、貧しく餓えて他人の家に入り込んで居候したり、洗濯ばあさんに食を恵んでもらうような生活をしていた。しかしその後彼は、淮陰ではすぐれた手腕を発揮してその国を治め余裕綽々であった。それなのに、若いころは自分の生活すら満足にできなかったというのはどうしてだろうか。

四〇一 蓋し豪傑俊英の士は、平生其の心を天下の大事に用う。而れども其の小處に於ては、則ち暇あらざる所あり。是の故に或いは雇人俗士の為に、常に嗤笑せらる。

蓋豪傑俊英之士、平生用其心於天下之大事、而其於小處、則有所不暇、是故或爲雇人俗士、常所嗤笑、

【訳】 考えてみると、豪傑俊英の人は、普段その心を天下の事に使う。しかし、身の回りのこのまごましたことについては、気にしないところがある。だから、時には、凡人や俗人に嘲笑されことがある。

四〇二 是の故に蘇秦嘗つて曰く。「我をして洛陽負廓の田二頃あらしめば、豈に能く六国の相印を佩びんや」と。

是故蘇秦嘗曰、使我有洛陽負廓田二頃、豈能佩六國之相印、乎、

【訳】 こういうわけで、蘇秦はかつてこういった。「私に洛陽の城壁の外に田を二百坪もあれば、六国の宰相などになっていなかっただろう」

四〇三 夫の蘇秦・張儀・蘇代・蘇厲の輩のごときは、固より子林に数うるに

足らず。然れども其の志す所は、本庸流に異る。終に能く榮を一時に竊むゆえんなり。丑二月廿二日、録して書生に示す。

若夫蘇秦・張儀・蘇代・蘇厲輩固不足數於子林、然其所志、本異於庸流、所以終能竊榮於一時也、丑二月廿二日、録示書生、

【訳】その蘇秦・張儀・蘇代・蘇厲たちは、もとより立派な人とは言えない。しかし、志すところは、平凡な人たちとは異なっている。だからしばらくの間は、榮えることができたのである。

明治十年二月二十二日
書いて書生に示す。

四〇四 余の書窓の前の山上に一松あり。歳を經ること纔かに四五十年なり。未だ甚だしくは古からずといえども、孤幹高く聳え、翠枝外に低く、庭中の竹樹と、相對して趣きを成す。余常に觀てこれを玩ぶ。

余書窓之前山上一松、經歲纔四五十年、雖未甚古而孤幹高聳、翠枝外低、與庭中之竹樹相對成趣、余常觀而玩之、

【訳】書齋の窓の前の山上に一本の松がる。まだ樹齡は四五十年ぐら이다。そんなに古いというほどものではないが、その幹は高くそびえ、緑の枝は外側に低く広がり、庭の竹と相對していてもむきがある。私は、いつもこれを觀て愛でて楽しんでゐる。

四〇五 比日一樵夫あり、斧を持して且に伐らんとす。余、価を倍にしてこれを買う。其の書窓の風風致を損ぜんがためなり。

比日有一樵夫持斧且伐、余倍價買之、爲其損書窓之風致也、

【訳】近頃のこと、一人の樵が斧でまさに伐ろうとしていた。私は、その木の代金を倍にしてこれを買った。それは書齋の窓の趣のある風景を損なわなためである。

四〇六 昔、明の吳康齋、書を読みて膏乏しく、家人薪を焼きて明と為す。其の貧しきことかくのごとし。而して余輩優游閑適、此の無益の拳を為す。真に自

ら笑うべし。

昔者明吳康齋、讀書之膏、家人燒薪爲明、其貧如此、而余輩優游閑適、爲此無益之舉、眞可自笑矣。

【訳】昔、明の吳康齋は書物を読むとき明かりの油がなく、家族が薪を燃やして明かりにした。その貧しさというのはこのようなものであった。それなのに、私は暇があつて思ひのまま過ごし役に立たないことをしている。自分でも笑つてしまう。

四〇七 前賢はこれ苦節、余輩はこれ優游。宣なるかな、其の平生の学ぶ所、得力の浅深厚薄の得て同じかるべからざること。丑二月廿七日、録して書生に示す。

前賢之苦節、余輩之優游、宣哉其平生所學、得力淺深厚薄之不可得而同也、

丑二月廿七日、録示書生、

【訳】あの吳康齋は大変な苦勞しており、私は暇があつて悠々としている。もっともなことだな、その普段の学ぶこと、得る力の深い浅い厚い薄いがあるのは。

明治十年二月二十七日